

大学の活性化のために

―外国語教育の改革を中心に―

1

昨年（九一年）七月に文部省が行った大学設置基準の改正は、新制大学発足以来の大改革と言われている。私もその通りだと思うものの、その印象は、さらに一年前（九〇年七月）に出た「大学教育部会における審議の概要」を読んだときの方がはるかに強く大きかったのである。そのわけは、この「概要」が、一般教育の見直しだけでなく、学部制そのものも批判している風に見えたからだ。この「概要」のあと、翌九一年一月に「大学教育部会報告」、さらに二月に「大学審議会答申」が出され、七月の改正にいたるのだが、この学部制見直し論は、その間に、底流にはあるのかもし

れないがいつしかトーン・ダウンし、表面の文章からは消えているのである。しかしそれでも、私は今度の改正を歓迎したい。

同僚のなかには、文部省の主導ということでアレルギ―を起すひともいるけれど、実際はそういうことでもなかったらしい。例えば朝日新聞の特集記事『変わる大学』（一九九二年六月二一日付朝刊）におおむね次のような記述がある。

臨時教育審議会の専門委員の一人で答申後には改革路線の具体策を練った戸田修三中央大名誉教授は、この二、三年、全国各地の大学で五十回もの講演を続けている。松葉杖をつくほどの不自由な身体をおしてでも出かけるのは、「今度の改革は文部省の主導ではなく大学人の発想。そのこ

東 宏 治

とを知ってもらいたい」という思いからだった、と言うのである。

今回、「改正」が批判する大学の問題点は、実は私自身が学生や院生だった二十年、三十年も以前から感じていたことだったし、教師になってとくに語学教育の面で（研究・教育の組織の面も含めて）改革案のようなものを同僚たちと考えたことが二、三度あったけれど、その都度、他でもない改正前の当の大学設置基準の課す枠に触れて実現しなかったという無念な思いがある。だから今度の改正がその枠をとり払うのは遅きに失したと思うとともに、やっとその機会がきたという喜びもあるのだ。私はシニカルな同僚のアレルギーが気にならないわけではないけれど、素直に今回の機会を受け容れたいと思う。

以下に「大学の活性化のために」、主に語学教育のカリキュラムの改革について、私個人の考えを（あるいは夢を）述べてみたい。私が現在所属する組織（第二外語、法学部）での議論と一致するところもあれば、少しかけ離れたところもあるかもしれない。あえて私個人の、と断わるゆえんである。

2

今回の大学設置基準の大綱化は、「大学等における教育・

研究の高度化、個性化、活性化」（文部大臣による大学審議会への諮問事項のなかの表現）を目指したもののだが、こうした（つまり、高度化、個性化、活性化、活性化をねらった）改革をすでに大綱化令の出る前から行っている大学もあって、私の知り得た範囲でのいくつかの大学のなかで、とくに慶應大学の藤沢キャンパスのカリキュラムは、少なくとも私には大変個性的で魅力的であると思われる。とりわけ二つの新設学部設置の理念や、語学教育に関する考え方、具体的なカリキュラムに惹かれるのである。（特徴的なのは、これらの早目に改革をしているどの大学も、語学教育のカリキュラムを最重要視していることだ。もちろんこれまでの語学教育のシステムを否定したうえで。）

慶應の二つの新しい学部「総合政策学部」「環境情報学部」設立の共通の「理念」を、①人間と環境の重視 ②情報処理能力 ③総合的判断力 ④国際的視野 ⑤創造性の開発という五つの標語が表わしていて、ひとつひとつともな教育理念だし、同志社だって同じものを、例えば国際主義などすでにかかげているわけだが、私がそれ以上に共感するのは、これらの標語の基底にあるところの、大学は教師が学生に知識を与える場所というよりも、学生自身が自分で問題を発見し、自分で解決する能力を養う場とするという考え方である。現実的に、実際の役に立つ能力を身につけることであって、語学教育についてもこれと同じ考

えが基本にあるように思われる。それは、ある座談会での総合政策学部長の「語学は自己表現の技術」という発言にも表われている。つまり慶應は、語るべきメッセージと語る能力とをもった学生の養成を目指しているのだ。

藤沢キャンパスの語学教育の最も個性的な方策は、「インテンシヴコース」という、従来のいわゆる「受信型」から「発信型」への脱皮をねらって、一人の外国人と二人の日本人の教師のチームで、週四日、午前中を使つた授業を置いたことだろう。この方策の思い切つた点は、英語中心主義を脱却したところであつて、それはアジア系言語を重視するという意味とともに、英語を第一外国語、他の国語を第二外国語とする従来の二外国語主義をアブハチ取らずとしてひとまず排し、英語も含めた数カ国語から一つの外国語を学生に選択させて、一年半、インテンシヴの（集中して徹底した）授業を受けさせるということである。

3

さてここで話を同志社大学に移さなければならない。私は藤沢キャンパスのカリキュラムをそのまま同志社大学の語学教育の活性化のために採用すればよいと考えているわけではない。賛成、反対いずれにせよ、このカリキュラムは、これからの語学教育を考える上で避けて通ることので

きないいくつかの問題を、（このカリキュラムの主張が極めてはっきりとしているがゆえに）突きつけていると思うので、それを三点にしばって論じ、同志社の場合の道を（解答を）探してみたいのである。そもそも語学を含めて大綱化のカリキュラムをどう編成するかは各学部が決定する事柄であつて、私にできることは、現在一学部に所属しつつ、ごく近い将来、英語、二外の教員たちの新組織に移るであろう語学担当者として、学部にいる間は教授会の対議に参加し、学部を離れば現場での語学教育の担当者であり責任者として要請したり助言したり訴えたりすることだろう。

今後の語学教育のためにまず第一に考えるべき問題点は、学生の（ひいては教師の）モチベーションのことである。各学部、学科は、学生の自由な選択に任せるのか、当学部卒業生として当然必要必須科目として課すのか。英語のみにするのか、英語とその他の外国語という二外国語とするのか、藤沢キャンパスのように、英語も含めた外国語から一つを選ばせそれを徹底させるのか（二つ目は教養外国語でよしとする考えもある）。

私個人としては、語学はモチベーションのあるときが最も学ぶ潮時だと思い、学生の自由選択に任せればよいと考える。ただしその必要を感じたとき（どの学年ででも、ま

たとえ卒業して社会人になっている場合でも）簡単に受講できる形態にカリキュラムがなっていないなければならないが。もし外国語を二つ義務づけるのであれば、必ずしも英語を第一外国語としないでよいようにしたい。そして自由選択化と矛盾するけれど、もし例えば情報学部のような新設の学部ができるようなら、徹底したインテンシヴを必修とするのも悪くないとも考える。

第二点は、語学教育はやる以上は、これまでと違って、徹底したもの、集中的なもの、四年間継続させるものでなければならぬことである。藤沢キャンパスのような、一週四コマ、一年半というインテンシヴも考えられるし、一週三ないし四コマの半期だけの短期集中で最少必要限の口語的文法知識と基本文を体系的に学んだあと、本人の希望や必要に応じて、会話、読本・講読、作文・論文、オーディオ・ビジュアルなど読み書き聞き話すの各コースのいずれかを、或いは全部を、継続してまたは断続的に、四年間とることができるのも悪くないだろう。

第三点は、語学というものはやはり外国語を実際的なコミュニケーションの道具として教える科目だと認めることだろう。話を簡単にするためにフランス語を使えば（却ってわかりにくくなるかもしれないけれど）、ラングやエクリ

チュールではなく、まずパロールを教えるということだ。こうした認識が教える側になかなか徹底しなかったのは、語学教師はこれまでのところ大抵文学を専門に研究しながらも、教える科目としてはもっぱら語学教育に限られていたためであり、さらに淵源をたどれば、専門教育と一般教育を截然と区別し、それぞれをもっぱらに担当する教師を振り分けさせた旧大学設置基準がつくりだした不幸でもあったと言える。これは最終章でも触れたいが、私に言わせれば、一般教育には一般教育を専門に教える教師が必要だったのではなく、専門を教える教師がその蘊蓄を傾けてその専門に所属しない学生たちを相手に一般教育も同時に担当すべきだったのであり（この点同志社大学は半分すでに賢明なシステムをとっていた、研究者として専門家であるはずの大学の教員は全て専門教育と一般教育とを担当すべきだったのである（この点半分立遅れている）。私の同僚たちのなかには、大学の語学教育は街の語学学校やカルチャーセンターのそれとは異なると言うひともある。私もそうであることを願っているけれど、それは、大学と語学学校とでは教えるべき事柄が違うからではなくて、教える人の長年研鑽してきたものの違いから、同じ文法事項や単語ひとつを説明しても、花から香りが立つ風に、その国の文化の香りがどこからともなく匂ったり匂わなかったりする、といった違いなのではないかと思う。（だから大学で教える

からと言って、つねに香りがするわけではないのである。)

4

以上のような考察をしたあとで、私はここで私個人の幾分具体的な(と言ってもごくアウトラインをなぞっただけの)カリキュラム案を示してみたい。

表は初習の外国語を一年前期から初級を始める人を一応モデルに、あと四年間、継続的に、連続的に、あるいは断続的にいくつでも選択して受講できるようになっている。インテンシヴコースと短期(半期)集中コース以外は、どれも半期制で週一回のつもりである。

サマープログラムやそれを拡大した留学制度を提携大学と結び、学生の交換とともに、研究者(大学院生も含めて)の交換制度にまで(全ての語部で)発展させられればと思う。

5

すでにちよつと触れたけれど、私は旧設置基準での一般教育の総花的なシステム(三系列から各三科目、合計三十六単位)は失敗だったが、自分でものを考えて広い(あるいは片寄らない)視野をもたせるといふ一般教育の理念は生

I (前期)	(半期集中) 4 初級文法コース			8~12 インテンシヴコース (1年半)	各2 発音特訓コース Audio-Visual コース 等
I (後期) Ⅲ IV	各2 会話コース 初・中・上	各2 読本・講読コース 初・中・上	2各2 作文・論文コース 中級文法コース 初・中・上	各2 外国人演習コース	
各コースの 基本的性格	話す	読む	書く	統合的	補足的 基礎的

る。

(大学法学部教授)

言及した主な文献

産経新聞社会部編 『大学を問う ―荒廃する現場からの報告―』 (新潮社)

三浦信孝 「大学における新しい外国語教育政策 ―慶應大学SFCのフランス語教育―」 (『フランス語教育』二〇号 日本フランス語教育学会)

「座談会に新しい大学像に挑む (加藤寛、松前紀男、中村秀一郎)」 (朝日新聞、一九九二年八月十四日 朝刊)

「特集 変わる大学 (第二部 壁)」 (朝日新聞 一九九二年六月三〇日 朝刊)

き残ると思う。ただそのための方法は、人文、社会、自然の三つのどの分野もといった欲張った、しかし「広く浅く」ではなく、専攻分野とほぼ同程度に「深く」、しかし専攻領域とは別種の分野を一つか二つ、四年間学ばせるという、いわゆる「主専攻、副専攻」制か今のところ思い浮かばない。各学部、学科がその専攻学生としてのアイデンティティーを示すのに最低限必要と考える「必修」の単位以外の単位を、その専攻とは別種のものの方(知識の枠組、パラダイム)を知るためにある程度まとまった形で取らせるシステムである。学生が自分で自由に他学部、他学科・諸組織の科目を選択して、私たち教師も目を見張るような新しい知的な組み合わせの単位蒐集をしてくれればしめたものだが、いわゆる「楽勝な」科目の単位ばかりを集める場合を心配するなら、副専攻コースとしてのモデルを(しかしその枠は極力古い学問区分に閉じこめないものであつてほしい)示す必要が出てくるかもしれない。

私はここで、英語や第二外語の担当者たちの新しい組織が認知され、語学教育のほかに、自分の専門として研究している広い意味での言語文化の分野での講義やゼミを全学的に提供して、学生たちの副専攻科目の選択に刺激を与えるようになることを願うものだ。同志社大学の研究・教育の「高度化、個性化、活性化」の一翼をになうために、これはきつと有意義な人的資材の使い方になると信じてい

同志社大学の「活性化」のために

岡 本 博 公

自己変革能力が問われている

大学をめぐる論議が大学の内外でひとときわ活発になって
いる。大学のありようが国民的関心を呼んでいるといつて
も過言ではない。実際、大学の進学率は三七・七%、大学
進学者と専門学校進学者を合わせた比率は五五%に達して
おり（一九九一年次文部省統計）、後者には大学進学を希望し
ながら断念したものがかなりの部分に達するであろうか
ら、いまや大学は国民の過半数を、（現実を受け入れている
かどうかは別にして）需要者とする時代に至っており、大
学の現在が、そして今後の方向が国民にとって重大な関心
事であるのも当然であるといつてよい。

論点も多様である。大学教育のあり方、研究の現状、入

試制度、大学経営、はては大学教授になる方法の伝授まで、
さまざまな視角から今日の大学の実態が明らかにされ、批
判され、あるいは大学への期待が表明され（もちろん失望
もある）、今後の方向が模索されている。

提起された批判や論点の中には私たちが真剣に受けとめ
ねばならないものが多い。大学の内外で多様な大学論が語
られる中で、私たちが考えるべき論点はほぼ出尽くしてい
る感さえある。おそらくいま必要なことは、さまざまな形
で別個に提起されている多様な論点を、それぞれの大学の
実情に即して総合的に判断し、取捨選択して、それらをい
かに現実の改革に結び付けていくか、このことだろう。私
たちは、さまざまな批判や期待・要請を真剣にかつ慎重に
検討しながら、私たち自身の手で大学をつくりかえ、こう

した期待や要請に応えていかねばならない。問われているのは大学の自己変革能力である。

したがって、この論説に与えられたテーマ、「大学を活性化すること」とは、私は、国民の批判や期待をうけて、大学が自身の手によって改革していくこと、そのための大きな努力を私たちが傾けることではないだろうか考える。「大学の活性化」は、大学の自己変革によってしかありえないだろう。そうして「大学が活性化している」とは、大学自身がたえず自己検証しながら変革していく、その姿をさすのであろう。

率直に言って、私は、同志社大学は近隣の諸大学に比べて動きが鈍い、と思う。同志社大学は沈滞のなかにあるという批判があるだろうと思う。だとすれば、それは同志社大学の自己変革能力が疑われていることになるう。

教育努力は大きいのだが

教学改革を考えてみる。私が所属する商学部をとりあげてみよう。

商学部は、私が赴任して以来十数年の間に確実に入学難易度をあげており、今や超難関学部の一つにさえなっている。偏差値の高い、いわゆる「優秀な学生」を集めることにある程度成功した。それだけ「ランク」が上がったこと

になるわけである。

しかし、そのことは実際にはどの程度われわれの教育の成果によるものであろうか。はたして商学部教育が高く評価された結果なのだろうか。

たしかに、私の周辺では、教員はかつてに比べ格段に大きな努力を学生教育に注いでいる。個々の教員は各自でさまざまな工夫を凝らして講義やゼミを改善し、学生の学習意欲を喚起し、思考能力を育てようとしている。私の知るかぎり、このような一人一人の教員が教育に傾注するエネルギーは十数年前にくらべてはるかに大きくなっている。

しかし、一人一人の教員の努力が有機的な連携をもっているのか、そうしてそれが学部としての教育力量を高めることに結実しているのか、そのことが商学部の教育成果を高めることになったのか、だからこそ「優秀な」学生が集まるようになったのか、と問えば、残念ながら私にはそうとは思えない。

一人一人の教員の教育努力を有機的に連携づけるべき学部としての教育システムの骨格、つまりカリキュラムは、ほとんど信じられないことだが、私が赴任した十数年前とたいして変わっていない。したがって、学部としての教育力量がこの間の入学難度の上昇に対応するほど高まっているとはとてもいえない状況にあるといつてよいだろう。商学部が超難関学部の一つになったことが、商学部教育に対

する期待の高まりを反映しているのであるとすれば、私たちは必ずしもそうした期待には応えきれないことになる。学部教育の改革は、一人一人の教員の講義やゼミの改善だけで済ませるものではないからである。

カリキュラムをどういう方向で改革すべきかについてはなおさまざまな議論があろう。しかし、技術革新が進み、情報化や国際化が急激に進展して社会が大きく揺れ動いたこの間で、しかも現実との厳しい緊張関係が要求される学部で、十数年前も今も有効なカリキュラムがあるとは私には到底思えない。もし、時宜に応じた教育システムが必要であり、それにもかかわらずそれへの対応がなされなかったのであれば、私たちは、しばしば投げかけられる「沈滞」とか「安住」という批判をやはり甘受しなければならぬのではないだろうか。まさに自己変革能力が問われているのである。

全学の創意と総意で自己変革を

だが、私は、カリキュラム改革を骨格とする学部単位での教育システムの自己変革に関しては、ある面では楽観的である。大学設置基準の大綱化と自己点検・自己評価の要請によって、私たちはどのような教育・研究を行なうのかを、自らで厳しく問い続けざるをえなくなるであろう。したが

って、学部教育の理念や教育目標・カリキュラムのあり方については、恒常的な点検と改革の模索を否定なく続けざるをえなくなるからである。自己点検・自己評価が内発的なものでなかったことは惜しむべきことだが、しかし、いずれにしろ継続的な自己点検・自己評価作業の刺激のもとで、私たちの自己変革能力は、少なくとも学部の教育システムに関するかぎり必ず高められていくであろう。

しかし、学部を超える問題、全学レベルで改革がはからねばならない問題に関しては、私はそれほど楽観的ではない。

いま大学に要請されていることはなんだろうか。先にも触れたが、今日では同年齢の若者のおよそ四割が大学に進学している。こうした事態はしばしば大学の「大衆化」と表現されているが、大学教育はかつてないほど広範なかつ多様な学生の関心と知的欲求に応えるものでなければならぬ。一方、大学は同時に知の先駆者としての役割も果たなければならぬ。高度な専門教育機関であり、高度な研究機関でなければならぬ。さらに大学には生涯教育・社会人の再教育機関としての期待も高まっている。そのうえ留学生もますます増加している。こうして、いま、大学にはさまざまな役割が期待されている。

これらの多様な役割や機能はそれぞれ別個の主体によって担われるべきだという発想は当然ありうるし、現に一部

の大学では専ら高度な教育・研究機関として再生を図ろうとする大学院重点化構想などを追及している。しかし、同志社大学はそのような方向をめざすべきではないだろう。同志社大学の教学が発展する方向は、学部教育を改革・充実させて、広範かつ多様な学生の知的要求に添っていくとともに、同時に研究者養成機関として、さらには高度な専門教育機関として大学院の一層の改革・充実をはかつていくことであろう。

ところで、既存の学部や研究科の枠組みで情報化・学際化・国際化など時代の要請に応えきれているだろうか。もしそうではないのなら、そこでは学部を超えた、全学レベルの自己変革能力が問われることになる。改革の方向は、新たな学部や研究科の設置に結実するものかもしれないし、既存の学部や研究科の融合度を高めることなどによって解決されるものかもしれないが、いずれにしろ全学レベルで改革をおしすすめるなければならない。

これまで以上に学部教育と大学院の充実を同時にはかること、しかも既存の学部や研究科の枠組みを超えてそれを構想していくことは実は大変難しいことである。だが、それはどうしてもやりとげなければならぬことである。そのためには、私は、やはり全学の創意と総意を集めることによらざるをえないと考える。あたりまえのことかもしれないが、全学レベルの自己変革は全学の叡智を結集するこ

とによってしかできないであろうし、逆にまたそのことが可能であれば、同志社大学の自己変革も飛躍的に進展するであろうからである。

私は、その意味では、同志社大学の潜在的な自己変革能力に信頼をおいている。だが、それにもかかわらず必ずしも樂觀的ではないのは、全学の創意と総意を結集するシステムが同志社大学では不十分と思えるからである。教授会・部長会・評議会や各種の委員会、あるいは折にふれて設置される諮問委員会やその他の場でフォーマル・インフォーマルを問わず情報交流が行われているようだが、しかし全学の叡智を集めるという点では現状は決して十分ではない。

自己変革には組織的工夫が必要

私は、全学の創意と総意を集めるためには、何らかの組織的な工夫が必要ではないかと考えている。

私が、自己点検・自己評価が導入されればいずれにしろ学部教育システムは改革されざるをえないと考え、この点に関して比較的樂觀的なのは、学部教育は教授会で系統的に議論されているからであり、論議が蓄積され、方向が模索されているからである（ただし、教員・学生の意見をくみ上げるといふ点ではなお不十分ではあるが）。

同じように、全学レベルでも、自己変革のために論議を蓄積し、改革を模索する何らかの組織単位が必要ではなからうか。つまり、長期的な視野にたつて、必要な情報を学内外からていねいに、系統的に収集し、処理し、全学に提示し、これまでの論議の積み重ねを整理して、全学の創意と総意を集めて計画を策定していくスタッフ機構である。環境変化にさらされながら戦略を策定しなければならぬ現代の企業組織には総合企画室とか調査・計画室などといった名称で必ずこうしたスタッフ機構が設置されているが、同様の組織単位が必要である点では、今日の大学も例外ではないであろう。大学も、現代の企業と同様に厳しい環境変化のなかで自らを変えていかねばならないからである。

ただし、こうしたスタッフ機構は、それが全学の創意と総意を結集することができてはじめて有効に機能できることを重ねて強調しておこう。むしろ、こうしたスタッフ機構が長期構想を提示することによって一層改革への論議は刺激されるであろう。全学の創意と総意を集めるためには、こうしたスタッフ機構と同時に、全学的な調整が効果的にはかられるような別の組織的工夫がさらに加味される必要があるかもしれない。

京都の特性をいかして

いづれにしろ同志社大学は自己変革を遂げざるをえないわけだが、変革の方向を模索するうえでぜひ考慮していた点がある。それは、同志社大学が京都に位置しているという利点を意識的・積極的にいかせないだろうかということである。京都市には国公立大学二〇校、私立大学・短大が二八校所在しており（一九九一年四月現在）、日本の中で最も大学の集積度が高い都市が京都市である。この特性を活用する方向で改革を模索できれば、おそらく確実に新しい展望を切り開くことができるであろう。

大学の集積度が高いということは、既にただで大学間のより緊密な交流・連携の有利な条件である。単位の相互交換や共同セミナー、共同利用可能な教育施設の設置などによって、多様で個性的な教育の可能性は一層広がるだろう。

さらに、それだけ大学が密集していることは必然的に地域とさまざまな面で深い関わりをもっており、したがって、地域・自治体との連携・共同の可能性は高い。実際、京都市は京都を大学のまちとして位置付け、「京都市 大学二一プラン」を今年度中に策定するなど、大学をコアとする都市活性化プランを構想しており、地域・自治体からの幅広

い支持が期待できる。

また、京都には歴史と文化に深く根ざした種々の地場産業の集積があり、ユニークなベンチャー企業も輩出している。このような京都の産業界との共同は、東京や大阪など他都市にはみられない独自の个性的な、魅力的なものになるであろう。

したがって、こうした京都の特性を活かして、大学間の、

地域・自治体との、産業界との協力・共同がすめば、大学の自己変革―「活性化」の方向も一層多種・多彩に構想できるだろう。そうして、多種・多彩な改革構想が広がれば、それだけ全学の叡智を集めやすくなるのではないだろうか。

(大学商学部教授)



新島襄の掛軸の影本を頒布

同志社の創立者新島襄の書簡・色紙などの遺墨に接する機会は少なく、せめて複製された掛軸でも欲しいとのご要望に応えて、影本を、三点作成頒布しています。

この影本は、新島襄が元治元年、函館からの脱国に成功した後、航海日記に書きとめられた漢詩および明治二二年秋から二三年春にかけて、その心情を吐露された詩歌

の遺墨の中から選んだもので、同志社関係者のみでなく、一般社会にも強く訴えるものがあると思います。

◎掛 軸 (影本)

一軸 八、五〇〇円

(H) 「男兒決志馳千里 自嘗苦辛豈思家」

却笑春風吹雨夜 枕頭尚夢故園花

慶応元年三月ワイルド・ローヴァー

1号船上で作られた詩を明治一六年正月改めて浄書された。

(I) 「不止月下併能越 跋涉八州是我分」

壯圖却促男兒淚 滴々灑為縷々文

明治二二年一月新潟伝道に従事して

いた卒業生広津友信におくられた詩。

(J) 「いしかねも透れかしとて一筋に

射る矢にこむる大丈夫の意地」

明治二三年一月五日「送歳の詩」と同

様大磯百足屋で詠まれた和歌。

◎ 購入ご希望の方は左記へ直接電話また

は文書でお申し込みください。

◎ 代金および送料は現品送付の際、振込

用紙を同封しますから後日ご送金ください。

◎ 製作日数の関係で、納品が一カ月程度

遅れる場合があります。

同志社収益事業課

京都市上京区今出川通烏丸東入

電話(〇七五)―二五一―三〇三七・八